

限界利用説の二形態

オーストリア學派とローザンヌ學派

一

カール・メンガーがその名著「國民經濟學原理」に、而して茲では特に奧太利學派の爲に與へた基礎を所謂限界利用學説に見るものは、此の學説の再發見者としてメンガーと其の功績を分つ所のジエヴォンス並にワルラスの二氏を想はざるを得ない。奧派の限界利用 (*Grenznutzen*) がジエヴォンスの最終利用度 (*final degree of utility*) であり、更にワルラスの稀少性、或は満足せられたる最終欲望の強弱 (*rate ou l'intensité du dernier besoin satisfait*) と其の意味を等しくすることは改めて云ふ迄もない。各々は價格が限界利用の比に等しとの重要な點に於て互に略々一致する。然し乍ら、既に此の一致が偶然の暗合であつたことに依つて推測し得る如く、或は各々が此の學説に到達せる徑路を異にすることより想定し得るが如く、此の一致はそれ等の學説の全

部に及ぶものでは無い。即ち等しく限界利用説を以て呼ばれる三者の間にも幾多の相異なる點を見出し得るのである。特にメンガーを創設者とする奥地利學派の發達に對して實質に於て殆んど交渉なくワルラス及びパレートの名に於て知られるローザンヌ學派が對立することは、等しく限界利用説と呼ばれる兩者の間に最初より相當の距離を認め得べきことを暗示する。此の相違は限界利用説そのものゝ中には見出し難く寧ろ其全體としての把握、換言すれば兩學説の全構成に於ける限界利用説の地位に求むべきであらう、蓋し説そのものとしての兩者の一致は既に述べたる用語の意味の一致によつて容易に推知し得ればである。而して今や此等の學派は誕生以來半世紀の月日を重ねて、共に略々完成せられたる體系を示す。兩學派の發展を通じて此の異同を明にすることは限界利用説の理論經濟學に於ける地位に顧みて單なる興味以上を意味するものと云ひ得るであらう。メンガーの名著が幾十年の苦心を通じて新に版を重ねたることは此の試みに對して好個の機會を與へるものである。

二

順序として吾々はメンガー並にワルラスに於ける限界利用説一般に就て略述せねばならぬ。云ふまでもなく限界利用説の經濟學に於ける重要は主として價格との關係に於て見られる、所謂限界利用論者を以て自ら居る人が此の關係を重要視すること又勿論である。依つて此の點に注意を集中しつゝ先づメンガーに於ける説明を見たい。

メンガーの經濟學に於て其の思想の根底に立つものは價值概念である。「價值とは一定の經濟人が自己の欲望充足に際して具體的財貨の處分に依頼することを認識することに依つて其の財が獲得する意味である。それ故に價值は人間の意識以外に存在するものではなす」(Grundsätze 2. Aufl. S. 108)更に茲に所謂財とは「人間の欲望充足に對して有用なりと認識せられ且つ此目的の爲に處分し得るもの」と謂である。」(S. 108)斯くして經濟の成立點は處分し得べき一定量の財であり、各個の所有者が自己の欲望充足なる目標に對して財を統制する所に經濟の一切の問題は横はるのである。交換なる行爲も此の意味に於て經濟主體が能ふ限り其の位置を改善せんとする努力の一表現に外ならぬ。「交換行爲に於て彼に直接の意義を有するものは獨りこの目的の達成あるのみ。此の際に於て價格(メンガー)に於て價格とは交換に於て相互に授受せられる財の分量を云ふ。」は單に偶然の現象に過ぎない、或は諸人間經濟間の經濟的平衡の徴候に過ぎない。従つて經濟主體に對しては第二次的の關心を有するものに外ならぬ。(S. 108)價格は斯様にして遂に價值法則の一種の表現に外ならず、經濟學に於て解決すべき一切の問題は既に價值法則の中に存するのである。故に吾々は價值理論に就いてメンガーの到達した結果の主要なるものを次に要約しやう。

上述の如く、財はそれ自らに於て價值を有するものではない。「究極に於て吾々に意味をもつものは吾人の欲望充足のみである。一切の財の價值は單に此の重要を經濟財の上に移したるものに止まる。それ故に吾々が實際生活に於て觀察し得るが如き個々の財の價值量の相違も亦一に、吾々が此の財の處分に依つて左右せられる各欲望

充足が吾々に對して有する意味に依つて基礎づけられねばならぬ。(S. 119.) 即ち一定財に依頼する欲望充足の意味は、換言すれば一定財の利用の大きさは、同時に其の財の價値の尺度である。一方に於て可處分財の量、他方に於て欲望充足の順位の考察は次の如き形をとつて云ひ表はされる、曰く「或る個人にとつて可處分財量の一部分量の價値は、全量に依つて保證せられ、又同一の部分を以て満足し得る、欲望充足の中最も重要ならざるものゝ意味に相等し。(S. 127.) 換言すれば一財の價値は其の限界利用に依つて測定せられるのである。吾々は此の間に、限界利用學説の反對者に依つて時に或は殘し得べき唯一の眞理として支持せられる利用遞減の法則を見出す。(S. 128.) 然し乍らメンガーに於て此の法則の意味は獨り價値決定の上述の説明に結合せられてのみ理解せらるべきである。儲價格と本質に於て同意義なる交換に於て此の價値法則は如何に働くか。メンガーは之を左の如く例示する。即ちA、B二人の交換に於ける地位を次の如しとして

A					B								
馬	50	40	30	20	10	0	馬	50	40	30	20	10	0
牛	50	—	—	—	—	—	牛	50	40	30	20	10	0

交換が順次一對一の比例に於て行はれる場合交換の限界如何を論究するのである。右の數字はA及びBに對して當該財單位が有する重要程度を示す、それはメンガーの注意する如く主として説明の便宜に出づるものであり、從つて欲望充足の絶體的大いさを示すものではなく、單に比較的大いさを示すものである。(S. 176. Anm.) 此の場合交換の限界は、各人をして交換に至らしめる理由の中に自ら見出される。即ち交換に依つて欲望のよりよき充足

を期し得ざるに至れば當然交換は其の終りを告げねばならぬ。交換を繼續するとに依つて其の當事者の一人が他の提供する財よりも自ら低く評價する財なきに至つて交換は當然終らねばならぬ。(S. 177.) 前例に就いて云へば

A	牛	50	40	30	—	B	牛	50	40	30	20
馬	50	40	30	20	—	馬	50	40	30	—	20
或は						A	牛	50	40	30	20
馬	50	40	30	—	—	馬	50	40	30	—	20
或は						B	牛	50	40	30	—
馬	50	40	30	—	—	馬	50	40	30	—	20

なる状態が之を示すものに他ならぬ、熟知せられたる表現を以て以上の結果を要約すれば、これ交換の限界は兩交換當事者にとつて限界利用の均等なる點に存するを示すものである。是等の價值法則から價格の一般原理に達するとは既に述べたる價格の意味に依つて其の間一步の差あるのみ。斯くてメンガーは場合を獨占と自由競争に分つて其の理を説明する、一般に引用せられる例に倣つて左の獨占價格成立の數字的例解を擧げよう。(S. 194.)

I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
80	70	60	50	40	30	20	10 Metz Getr.
B ₁ に對して							
B ₂ 同	70	60	50	40	30	20	10
B ₃ 同	60	50	40	30	20	10	—
B ₁ 同	50	40	30	20	10	—	—
B ₂ 同	40	30	20	10	—	—	—
B ₃ 同	30	20	10	—	—	—	—
B ₁ 同	20	10	—	—	—	—	—
B ₂ 同	10	—	—	—	—	—	—
B ₃ 同	—	—	—	—	—	—	—

限界利用説の二形態

右の表に於て B_1, B_2, \dots は多量の穀物を有し乍ら一匹の馬をも所有せざる農夫を示し右方の數字は此等の農夫の所有に入り來るべき第一、第二…の馬の價値を示す。今馬の獨占者 A が市場に唯一匹の馬を齎すと假定すれば B_1 が其の馬を獲得すべく、且價格は 70 と 80 との間に成立すべきこと確實である。更に獨占者 A が市場に三匹の馬を齎すとすれば右の表に示された經濟事實に基いて B_1 は馬二頭を B_2 は馬一頭を獲得すべく、價格は 60 と 70 との間に成立するであらう。斯くして各交換者の主觀的評價に由立して市場に於ける價値並に取引數量は決定せられるのである。此の説明方法は更に詳細にポエム・バヴェルクに於て見出される所であり (Bohm-Bawerk, Grundzüge, Conrads Jahrb. 1886.) 此の表に關する批評又少しとしない。然し乍ら吾々の當面の目的に對しては此處に示されたる價値が穀物の量に於て云ひ表はされて居る點に於て先に掲げたる交換の限界を示す表と著しく其の性質を異にする點に注目するを以て足りる。相違の主要點は主觀的なる利用の可測性に關する、後段ワルラスとの比較に於て此の點を顧みるであらう。

以上若干の引用と其の補綴とに依つて限界利用を中心とするメンガー説構成の一斑を述べた。墾太利學派の説を云ふ場合に採られるものはメンガーに非ずして其のよりよく統一せられ完成せられたる形に於けるポエム・バヴェルク乃至ウィーザーに依るを通常とする。吾々も亦以下の論述に必要な限りに於て此の兩者の説を聞かんとするものである、然し乍ら墾太利學派が以て自らを他と區別する立場は以上メンガーの主張に於て充分窺はれ得る。例へば、ポエム・バヴェルクが自ら墾太利學派を語つて「限界利用の觀念は恰も魔法の鍵の如し、賢者

は之を以て錯綜せる經濟生活の現象を、又經濟學最大の難問を解き得べし、而して私に思ふに塊太利學派の特殊の力、或は其の独自の意義は此の解決の技術にこそ横はる。」(Böhm-Bawerk, Gesammete Schriften, S. 209.)と云ふ所以のものは一應之を示し得るであらう。即ち意味する所は此の學派が主觀的價值理論を以て經濟學の一切を貫く一體系の樹立に成功したることを告げるものに他ならない。當面の目的たりし價格理論に就いて云へば、主觀的なる利用價值を原因として因果的に客觀的なる價格の成立變動を導き得たりとするものである。

轉じてワルラスを見る。既に述べたる如くワルラスに於てマンガーの限界利用に當るものは稀少性である。故に稀少性を中心にして氏の價格理論が如何に構成せられて居るかを見る。ワルラスの中心問題は平衡價格の成立及び變動法則の樹立である。「此の兩者を合して吾々は通常經濟學に於て需要供給の法則と呼ばれるもの、科學的形式に到達する。それは根本的の法則であるが今日に至る迄無意味或は誤謬なる表現より與へられなかつたものである。」(Walras, Elements, p. 134.) 平衡價格とは需要と供給とが市場に於て適合する價格を指すに外ならぬ。(p. 46) 但平衡價格が眞に平衡なる爲には之が單に需要供給の量に於ける適合を示すのみならず、更に交換當事者にとつて此の價格が最大満足を齎すものなることを證明せねばならぬ。ワルラスは先づ需要を分析して其の構成要素たる各個人の欲望の方程式或は利用の曲線を求め、交換の限界或は各個人の最大満足は交換後殘されたる各商品の稀少性の比が價格に等しき場合に得られることを證明する。(p. 22) 此の結果を二商品の交換に就いて示せば次の如くなる。今市場に於ける二商品を(A)(B)とし、 r_{a1} r_{b1} r_{a2} r_{b2} r_{a3} r_{b3} ……を交換後各所有者1 2 3 ……

に於ける各商品の稀少性(限界利用度)とすれば其の最大満足は上述の説明に依つて

$$\frac{r_{a,1}}{r_{b,1}} = p_a \quad \frac{r_{b,1}}{r_{a,1}} = p_b$$

$$\frac{r_{a,2}}{r_{b,2}} = p_a \quad \frac{r_{b,2}}{r_{a,2}} = p_b$$

$$\frac{r_{a,3}}{r_{b,3}} = p_a \quad \frac{r_{b,3}}{r_{a,3}} = p_b$$

となるべく、今價格 p_a (A)の交換價值 v_a と (B)の交換價值 v_b との比) p_b (B)の交換價值 v_b と (A)の交換價值 v_a との比)を中心に見れば

$$p_a = \frac{r_{a,1}}{r_{b,1}} = \frac{r_{a,2}}{r_{b,2}} = \frac{r_{a,3}}{r_{b,3}} = \dots$$

$$p_b = \frac{r_{b,1}}{r_{a,1}} = \frac{r_{b,2}}{r_{a,2}} = \frac{r_{b,3}}{r_{a,3}} = \dots$$

或は

$$v_a = 0_b$$

$$\dots r_{a,1} = p_{b,1}$$

$$\dots r_{a,2} = p_{b,2}$$

$$\dots r_{a,3} = p_{b,3}$$

$$\dots \dots \dots$$

となり一般に「平衡價格は稀少性の比に等し。又は、交換價值は稀少性に比例す。」(p. 101)との命題に達する。「自由競争に依つて統制せられる市場に於て二商品相互の交換とは、一又は他、或は兩商品を所有する一切の人が、其の賣買する商品を共通にして同一なる比例に於て授受する状態と兩立し得る限りに於て其の欲望の最大満足を獲得し得べき一の作用である。」(p. 98)此の共通にして同一なる比例が價格であり、而して特に平衡價格なることは再說することを必要としない。此の理論は商品が二個以上の場合に於ても其の儘適用せられる。(但商品の數を三個以上とする一般交換理論に於ては更に價格の一般平衡なる状態が附け加へられねばならないがそれは當面の目的には必要外である。)一般に「市場が一般的平衡状態にある場合には任意の二商品の稀少性の比は一方の他方に於ける價格に等しく、又此の比は此等の二商品の一切の所有者にとつて相等しい。」(p. 102)ワルラスの右の理論に於て注目すべき第一の點は其の目的とする平衡價格が一應は存在商品の量と價格を前提とする需要の方程式とに依つて解決せられることである。例へば二商品の場合に於て p_a を(A)の(B)に對する價格、 p_b を(B)の(A)に對する價格 D_a 及び O_a を(A)の有効なる需要及び供給 D_b 及び O_b を(B)の有効なる需要及び供給とすれば、有效需要の方程式として

$$D_a = F_a(p_a) ; D_b = F_b(p_b)$$

なる二個の等式を得べく、又需要と供給の等しきことを示すものとして、

$$D_a = O_a = D_b p_b ; D_b = O_b = D_a p_a$$

の二式が得られ、要するに D_1, D_2, O_1, O_2 の四個の末知數に對して四個の等式が成立し従つて問題は理論的に解決し得られるのである。之を稀少性に依つて示すは茲に示されたる需要の方程式を其の構成に迄解剖して個人の欲望充足との關係に於て價格との相關を立證するものに過ぎない。勿論氏は斯くして得たる結果を逆にして因果的に説明して居る。即ち交換價值が稀少性に比例的なることを立證せる後に曰く、「若し稀少性と交換價值とが隨伴的にして比例的なる現象なることを確實なりとすれば稀少性が交換價值の原因なることも又確實である。交換價值は重量と等しく相對的事實である、稀少性は物體と等しく絶對的の事實である。」(p. 112)更に平衡價格を決定する要素を(一)利用曲線(或は稀少性曲線)二、存在商品の量の二つとして此の二つから數學的に第一、需要曲線を生ずる、蓋し各交換者は欲望の最大満足を求めるからである。第二、この需要曲線から數學的に平衡價格が生ずる、蓋し市場には需要が供給に等しかるべき一の價格よりあり得ないからである。と説きて居る。(p. 39)然し乍らワルラスが稀少性を以て價格の原因なりとする右の論據はメンガーが利用價值を以て價格現象の説明を一貫する立場に比して全く同一とは爲し難く、ワルラス自らの組織に於ても亦此の立場は貫かれて居ない。然り、氏は他の場所に於て明白に次の如く述べて居る、曰く「理論的には經濟問題の一切の末知數は經濟的平衡の一切の方程式に依頼するものである」(p. 283)パレート又之の點を指摘してワルラスが稀少性を原因として經濟學の根底に置たことは當時の學界の輿論に動かされたものに過ぎないと述べて居る。(Pareto, Manuel, p. 217)斯くて吾々がワルラスの體系を全體として考へるとき、而して特にローザンヌ學派の創設者として氏を想ふ場合其の

説の本領は經濟問題の相關性の中に價格と稀少性との關係を確立する立場に求むべく稀少性を原因として價格現象を説明する點に求むべからざることを知る。限界利用の觀念から因果的に價格の成立變動を導く試みが如何なる點に於て又如何なる程度に於てワルラス説の構成を困難ならしめるか、因果説を捨てたるローザンヌ學派の修正が何に基くかに就いては、既に他の機會に論述した。(拙稿「數理經濟學に於ける二つの傾向と其の綜合の試み」とに就いて『商學研究』三ノ二參照) 依つて茲に再説しない。限界利用説に於ける二形態の一として吾々の論述の出发点を形づくるものは相關説としてのワルラスである。依つて先づメンガーとの關係に於て之を詳述した

III

所謂限界利用説をゴッセンの二大法則即ち利用遞減の法則と均等の法則に還元して考へる時メンガー及びワルラスの兩説が示す類似に就いては今改めて説く迄もない。壞派に云ふ限界利用はワルラスの稀少性であり、それは更にゴッセンの最終單位の價值 *Der Wert des letzten Atoms* p_q n_q (Gossen, *Entwicklung*, S. 45.) 故に吾々が出发点とする相違は、此の意味に於ける限界利用説のものには存しない。それは冒頭に於て明にしたる如く限界利用の觀念が兩學説に於て占る他位に求めねばならぬ。吾々は以上に一應此の相違を次の點に見た、即ちメンガーに於ては限界利用説が因果的に價格現象を闡明する原因とせられるに對しワルラスの稀少性は主と

して平衡價格との一定關係を示すものとして全經濟問題の相關性の中に其の位置を占めることこれである。

メンガーに於て限界利界利用説が原因として價格理論の根底に置かれることは既に利用價值を以て貫く其の構造の全部に求めて之を知り得べく敢て多くの論證を必要としない。經濟科學の對象に關する一般論を今暫く論外とするも、經濟學の出立點として「欲望の理論(或は其の本質の認識及び理解)は經濟科學にとつて根本的の意義をもつ」(S. 11)とする見解は「其の目的が欲望充足の爲に手段を確保するに存せざる一切の行爲は決して、或は單に其のことに依つて經濟の領域に入らなす」(S. 61)と語らしめる。欲望の充足はメンガーに於て原因的中心地位を占めるものであり従つて其の大いさを反映する價值は他の一切の經濟現象の解決に際して完全に原因としての立場に居るものである。更に上述の主觀的意義に於ける經濟と相並んで「欲望充足なる目的に對して動く財の總體概念」(S. 62)たる客觀的意義を採つて考へる場合にも其處に云ふ所の財が欲望充足に對して定義せられ欲望充足への直接間接の關係に於て一定の順位が與へられて居ることは周知のことである。此の立場は價格理論の關する限りに於て一層よくボエーム・バヴェルクに見られ得る。氏は所謂利用諸學説の中に特に塊太利學派の特質を説明して次の如く述べる。曰く「恰く知らず、如くジエヴォンス及びワルラスも亦〔塊派と〕同様なる價格法則に到達して居る。然し乍ら彼等の説明は著しき間隙を示す、始めて之を充實したるものは塊太利學派である。特に此派の人々は先づ需要供給の舊價格理論の一切が陥れられた *criticis vicissis* からの正當なる逃げ路を見出した。即ち一方に於て吾々が市場に於て申し出でんとする價格は吾々が其の商品に對して爲す價值評價に影響せられることは

否み難い所である、併し乍ら他方多くの場合に於て此の價值評價は其の商品の市價の状態から影響せられることも亦否定し難き所である。例へば余にとつて冬服の限界利用は、市場に於て既に十弗を以て補充し得るとすればそれが二十弗を要する場合に比して遙に低きことは明である。―それ故に需要供給の法則一般に對する正確なる心理的説明を必要なりとしたる此等の論者は、迷はされて通常此の説明を循環に陥れて居る。即ち彼等は多少共曖昧に價格を個人の價值評價より説明し、又個人の價值評價を價格から説明する。云ふ迄もなくこれは何の解決でもない。而も科學の名をかち得んとする一の科學は長い間此の解決に甘んずる外はなかつた。斯くて事物を其の根本に迄究めんとする一の試みは余が以上に示したる精細なる研究に依つて奧太利學派に依つて始めて爲されたのである。』と (Böhm-Bawerk, Gesammelte Schriften, S. 211—2) メンガー乃至ボエーム・バヴェルクの價格理論が果して純粹に價格の豫定を離れたりや否やは元より異論がある。吾々も亦後段此點に關説するであらう。メンガーの立場に關してこれ以上に止まる必要はないであらう。併し今これを以て奧太利學派を貫く主張であるとする時吾々は右のメンガーの説を見るに主として其の第二版に依つた事情を顧みねばならない。蓋し一版と二版との間には五十餘年の相違があり其の期間は同時に奧太利學派が其の主要なる全構造を爲し遂げた期間に外ならないからである。然し乍ら浩瀚なる其の全部について兩版の相違を論ずることは本稿の目的に遠かる。故に茲には以上の引用に直接關係を有し且本稿の目的に近き若干の考察を試みるであらう。

先づ上述の因果關係説に關聯して注意さるべき一、二版の相違は財の順位に關する一般論に於て見出される。

此の理論は第一版に於ては第一章財の一般理論中に「諸財の因果關係に就いて」と題して説かれた所であるが（Grundsätze, 1. Aufl. S. 7 f.）第二版に於ては第三章に移されて「人間の目的意識に於ける諸財の關係に就いて」と改められ第一版に於ける因果關係「因果聯絡 Kausalzusammenhang, Kausalnexus なる言葉は悉く單に關係、或は目的論的關係 Zusammenhang, teleologische Zusammenhang. と變更されて居る。メンガーは更に註して曰く「諸財の因果關係に着目して其の因果法則の確立に努力する人々は經濟理論の任務を見誤るものである。斯かる任務は自然科學、特に心理學の解決する所に屬する、吾々は之に反して諸財を人間の諸目的に對する手段として理解し其の經濟人の目的意識に於ける關係（其の目的論的關係）を研究し且つ其の法則を確立せねばならぬ」云々（Grundsätze, 2. Aufl. S. 21）然し乍ら一、二版に於ける此の言葉の相違は吾々が論述の中心とする所論の内容に於て必ずしも大なる相違を意味するものではない。吾用語の改革は既に第一版に於ても明に認め得べき次の點を一層明にしたるものと考へられる。即ち財は本質的に目的に對する手段としてのみ經濟學の對象たり得べきことこれである。既に古典の域にありと考へる財の順位に關する理論、即ち欲望充足を中心とする第一次の財、第二次、第三次、高級の財の區別は斯くして一層明瞭に把握せられるのである。

これは一二版の間に存する用語の相違として容易に認められる一例であるが、次に内容に於て稍重大なる相違を認め得る資本及び利子説をとつて考へて見る。舊版に於てメンガーは資本を定義して或る個人が來るべき將來に對して現在既に用意する所の高級次財の分量を云ふものとする。（Grundsätze, 1. Aufl. S. 130）生産の爲には高

級次財即ち茲に所謂資本を必要とする。詳言すれば生産に必要な時間、資本たる財を吾人の處分に確保し、又一定の生産行程に結びつけねばならぬ。『一定時間經濟財の分量を支配すること』を稱して氏は *Kapitalnutzungen* と云ふ。(Grundsätze, 1. Aufl. S. 133.) 利子は其の價格たるに外ならぬ。二版に於て資本に關する理論は第四章と第五章とに分つて收められる。而して吾々は其處に以上と略同様なる資本の定義乃至利子理論を見出し得る。

(2. Aufl. S. 100, 154.) 唯此の場合資本の定義を第一版に於けるより稍廣義に解して將來の爲に備へられる一切の財を資本と名づけるが如く解せられる點は次に述べる點と併せ考ふべき相違である。即ちメンガーは第一版と略同様なる資本理論の外に第一版に於て全く見るを得ざりし新資本利子説を示して居る。この點は第二版の編者自ら詳細なる注意を加へて居る所であるが吾々は今これをとつて新舊學說の相違如何を見やうとする。

新なる資本概念に入る爲にメンガーは先づ消費財 *Verbrauchsgüter* と利用財 *Nutzungsgüter* の區別から出立する。消費財とは一回限りの使用に依つて財の全性質若しくは其の特殊の財たる性質が破壊せられるものを云ふ。利用財とは之に反して數回の使用に耐え得るものを云ふ。資本の中には先づ利用財を數へねばならぬ、然し乍ら消費財の中にも原料、補助材料の如く生産に用ひられるものは經濟的には數回の利用 *Nutzung* を齎らすものと云ふべく從て之を資本中に數へねばならぬ。斯くて資本には消費財 *Verbrauchsgüterkapitalien* と利用財 *Nutzungsgüterkapitalien* の二種があり、資本一般には「技術的又は經濟的に其の本幹が單なる利用に向けられるものであつて消費に向けられるに非ざる」一切の財を理解せねばならぬ。(2. Aufl. S. 90.) 此の廣義の資本に對立

するものは消費貯藏 *Verbrauchsvorrat* である。メンガーは此の二つの對立から純粹資本利用 *reinen Kapitalnutzung* なる概念を導き出して來る。即ち氏は資本と消費貯藏との中間に長き期間に亘つて遂に使用し盡される財 *Verbrauchsgüter* (例へば住宅) を認めて來る。此等の財は數回の使用に耐え従つて數回の利用を提供するものと云へる。然し乍ら其の利用の中には少部分の財消費を含むが故に之を其の使用に於て聊も其性質を損せざる眞正の資本(例へば土地)の利用とは區別せねばならぬ。後者の利用を稱して純利用と云ふ。然して前者と後者とを同一視得るは何等かの準備に依つて *Verbrauchsgüter* を利用財と同一視し、技術的消費を利用と同一ならしめることを得る條件の下に於てのみ可能である。かかる準備は如何にして行はれるか、それは其の財の全部利用から其の財を元の可使用状態に回復するに要する丈けを除くことに依つてのみ可能である、かくて残されたものは純利用と見做し得る。メンガーはこの純利用と利子との關係を明示しない。然し右の總利用と純利用の區別は優に利子を以て純利用の對價たらしめんとする試を暗示する。之を第一版に於ける資本利用なる言葉に對比するに吾々は先に資本財の處分に對する對價として理解せられたる利子が今はより多く利用に依つて理解せられんとする傾向を看取する。勿論メンガーの右の資本論は同書中の他の部分と必ずしも一致せざるのみならず彼の有名な *“Zur Theorie des Kapitals”* の資本論とも一致しない *S. Jahrb. f. N. u. Stat. N. F. Bd. 7. (1888)* 故に之を以てメンガーの新資本論を斷ずることは元より早計である。唯吾々の云はんと欲するところは此の見易き變化の一例を取るも、利用に基く因果關係的立場には大なる動搖なきのみならず、此の一例に即して云へば寧ろ前版に

於けるよりも一層徹底したる形に於て之が示されると云ふことのみである。之を要するに、少なくとも吾々が問題の中心としたる價值價格論に就いては第二版を第一版と同視することは一應許さるべきである。新舊二版を通じて利用を以て價格を因果的に説明せんとするメンガーの立場には大なる變化を認め難いと云はざるを得ない。

翻つてワルラスに於ける限界利用説の地位如何。此の場合ワルラスがメンガーと同様に價格に對する因果的説明を明示してゐることは比較の立場を著しく困難にする。然し乍ら吾々はワルラスの全體系を通じて其の稀少性が原因とせられる點に重きを置かず、寧ろ經濟的相關の全體の中に一定の地位を占めるものなる點を高潮すべきことを見た。このことは既に述べたる説明に加へてワルラスの價格論が常に價格を前提して居ることを見ても亦悟り得る。即ち氏は明に之を認めて始に所與とする價格と説明せんとする價格とを分ち後者を現在價格或は平衡價格と呼んでゐる。平衡價格とは不斷の變化を續ける經濟的相關の中に見出さるゝ一靜止點である。稀少性も亦其の相關的量の一として平衡價格と一定の關係を保持するものに過ぎない。併し乍ら今吾々は氏の全體系を茲に再現することを得ない。メンガーとの相關に於てワルラスの對立的立場を明瞭に描き出すべき鍵は何に求むべきか。余は之れを特殊なる經濟學の方法に求め様と思ふ。蓋し相似たる多くの點をもつ壘太利學派とローザンヌ學派を截然分つて二となすのみならず、其の發達に於て一見互に相交渉なきを思はせるものは實に其の方法に存するからである。茲に特殊の方法とはローザンヌ學派に於ける而して又實にワルラスに於ける數學的方法を指すもの外ならぬ。蓋し經濟學一般の性質を如何に見るかに於て、其の對象を如何に見るかに於てメンガーとワルラスと

の間には相違よりも寧ろ相似の多きを認むべく假りに相異なる幾多の點を數ふるとしても其差の茲に所謂數學方法に於けるより甚だしきは無いが故である。兩者の方法論一般に就いて論ずることは茲に其の任務とする所ではない、依つて次に若干の相似たる立場を例示するに止めて此の點に入るであらう。

經濟學構成の問題に於ける兩者の相似は先づ各が經濟學史上に有する地位に於て現はれる。由來奧太利學派の經濟學に於て有する意味は從來論じ來つた學說の内容に加へて之を貫く鮮明なる方法論にありとせられる。通常所謂歴史學派に反對して正統學派を心理的に深化するものとして理解せられる立場これである。ポエトム・バヴエルクは正統學派との比較に於て奧太利學派の仕事を次の如く語る。即ち、正統學派が天才的眼光を以て經濟現象の渦中から數個の規則性を發見し、更に同様なる天才を以て此の説明を始めたことは之を認める。更に正統學派に於ても之等の斷片的規則性の説明が或程度に深化せられ一般に説明の最後の根據が人間の幸福にありと云ふ眞理も認められて居た。然るに之を基礎としたる統一的説明が遂に達成せられざりしは何に基くか、これ彼等が交換價值―財を中心とする人間對人間の問題―に重點を置き、使用價值即ち人間と財との關係に就いては何等の深き注意を拂はざりしに由る。然し乍ら此の兩者は相まつて始めて完全なる説明に至り得べく、交換價值に就いて發見せられたる斷片的の規則性と雖も使用價值のより精密なる研究に依りて始めて完きを得べきである。換派に依りて爲されたる經濟學のルネッサンスの意味は此の點にこそ認めらるべきである。と (Böhm-Bawerk, Gesammete Schriften, ss. 123—5.)

正統學派の深化とは斯かる意味に於てであり、従つて斯かる規則性に達

する方法自體に於ては正統學派に近き立場を有することは大體想見し得よう。この立場は少くともシュモラーに依つて代表される後期歴史學派がロツシアーに其の代表を見出す前期歴史學派に比較して、より多く事實の蒐集を學問的關心の中心とするに至れる當時に顧みて正統學派の方法の再現を思はしむるに充分である。今、所謂數理經濟學の發達史に於てワルラスの占むる地位が如上のメンガーに對して相似たることは特に吾々の興味を惹く點である。即ち數理學派に於て著しき二つの傾向をクルノーに依つて代表さるゝ現實學派とゴツセンに依つて代表さるゝ心理學派とに分てばワルラスの地位は兩者の綜合の試みに見出され得る。現實學派とは現象そのものに出立して現象間の關係作用の法則を求めることを任務とするものであり、例へばクルノーが需要の法則（需要量と價格との一定相關々係）を與へられたるものとして此の上に現象相互を規定する法則を樹立するものを云ひ、心理學派とは人間の感情の研究より右の現象の根本的原理に到達せんとするものゝ謂である。而して方法をクルノーに受け、從來兩派に依りて達成せられたる結果を綜合的に示し、且之等の結果を相互的に規定する方程式の組織に到達したるものはワルラスであつた。パレート又此の消息を明示して曰く、レオン・ワルラスは經濟的諸現象を綜合的に觀察したる第一人者である。氏は自由競争なる前提の下に此等の相關性を表示し、且決定する方程式の一組織を樹立した。故に此の方程式の組織に對してはワルラスの方程式 *Walras'sche Gleichungen* の名稱が與へられる。」と。(Pareto, *Anwendungen*, S. 1098) 此の方程式の組織に對して範となるものはクルノーのそれである、氏が父オーグユスト・ワルラスより得たる稀少性の考を以て之を深化し、一般化したる趣

は上述メンガーの正統學派に對する關係に彷彿たるものがある。然し乍ら斯かる類似は之に伴ふ内容を示さざる限り遂に興味ある學說史上の一搜話に止らざるを得ない。内容に就いての根本的異同は本稿の一切を通じて看取さるべき所である。故に茲には此の學說史上の相似を補充する意味に於て若干の方法論的見解を引用するに止め、以て相違の主點へ導く準備とするであらう。メンガーは自らの方法を所謂經驗的方法に對して「正確方法」と呼ぶ。正確方法の目的とする所は「典型的關係の確立、現象の法則」に達することにある。「吾々は經濟的諸現象を其の構成要素に迄還元し、且つ之に其の性質に應じたる容量を與へることに依つてのみ此等の現象の理論的理解に到達し得る。吾々は斯くしてのみ發達し行く人間經濟の錯綜せる現象を內的規則性の一の織物として把握し得る。」のである。(Grundsätze, S. 42.)斯くて「理論經濟學の問題とする所は經濟行爲に對する實際的の獻言ではなく、それは人間が其の欲望充足に向ける思慮深き行爲を展開せしむる條件に存する。」(Grundsätze, S. XXI.)従つて時に屢々人間行爲の完全なる規則性に對する一の障害として示される自由意思は「人間經濟行爲の結果を制約する、人間の意思を全く離れたる現象に對しては決して障害たるものではない」のである。(S. XXII.)而して斯かる方法の所産が個別的なる又發展する所の現實に對して、よく其の説明たり得る所以は其の觀點を嚴密に典型的なる要素に限ることに依つて、又この典型的要素を吾々の經驗から求めることに依つて與へられるのである。ワルラスに就いても亦略之と同様なる見解が見出され得る。ワルラスに就て交換價値の理論は正當なる意味に於ける科學の中にあり従つて事實に就いて其の關係及び法則を求むること、即ち一切の科學的研究の目的は又

純粹經濟學の目的である。(Wallas, Elements, p. 16) 氏は交換價値を以て自然的なるものとする見解に加へてメ
ンガーと同じく自由意思の問題に觸て曰く「然し乍らこのことは吾々が價格に對して何等の行動をもとり能はぬ
意味ではない。…例へば小麥に就いて吾々は貯藏の一部分を破棄することに依つて其の價格を騰貴せしめ得べ
く、又吾々は小麥の代りにライ麥、馬鈴薯或は其他の食料を用ふることに依つて小麥の價格を下落せしめ得るで
あらう。否更に進んで吾々は小麥は二四フランに非ずして二〇フランに賣らるべしと命令することも出來やう。
第一の場合に就ては吾々は價格なる事實の原因に働きかけて一の自然價格を他の自然價格に置き代へるにすぎな
い。第二の場合に於ては自然的價格を人工的價格に置き代へる爲めに事實そのものに働きかけるのである。最後
に嚴格に云へば吾々は交換を廢止することに依つて價格を廢止することさへ爲し得る。然し乍ら吾々にして一旦
交換する場合には、貯藏及び消費の一定状態を與へられたりとして、或は一言を以てすれば稀少性の一定條件が
與へたりとして、其處には一定の價格が自然的に結果する、或は自然的に一定價格を生ずる傾向をもつより外は
ないのである。」(Elements, p. 27) 斯かる交換價値の法則を見出す爲に、而して特に氏に於ては之を數學的方法
に於て行ふが爲に「經濟學は交換、供給、需要、市場、資本、所得、生産奉仕、生産物の諸典型を經驗から借り
來らねばならぬ。更に此等現實の諸典型より經濟學は定義に依つて理想的典型を抽象し來らねばならぬ。」のであ
る。(p. 30) 茲に於ても之等の典型を基礎とする理論の現實に對する妥當性はその典型が最初に現實そのものから
得られたる點に求めねばならない。此等の見解は各々に多少の異なる意味を含むこと勿論であるが共に抽象的な

る正確方法たるに於て根本の基調を一にする、以下に主たる相違として説かんとする氏の數理的方法と雖も一の合理的方法にして所謂經驗的のものに非ざる點に於ては又此の基調に於ける一致を破るものではない。ワルラス自ら自己の方法とメンガーの方法とを合理的科學として同一視し、之を經驗的なる歴史學派に對立せしめて居る。「ジエヴォンス及び余が純粹經濟學を數理的科學として限界利用度或は稀少性の上に礎きたりしと時を同じくしてメンガー及び奧太利學派は之を合理科學 science rationnelle」として右と同一なる限界利用の基礎の上に建設した。時は恰も獨逸に於て歴史的經濟學の大運動と講座よりする社會主義とが生れたときである。然し乍らこの二つを互に相反するものとする主張には賛成し難し。」¹⁾ (Walras, *Applicquée*, p. 457-8) 蓋しワルラスに於て數理的方法は一の合理的方法に外ならないが故である。(Walras, *Éléments*, p. 29) ウイーザーも亦奧太利學派に於ける抽象の根據が經驗にあることを説き、抽象に於ける理想化の方法に於てワルラスと一致することを明言する。曰く「レオン・ワルラス氏は、氏自らも亦用ふる此の方法に就いて甚だ愉快にも、それは理想化すると述べて居る。……それは自然を模寫するものではなく。吾々に其の單純化せられたる表現を與へるものである。それは斷じて誤れる表現ではない、否複雑なる現實の前に吾々の視覚を鋭くするものである」と。(Wieser, *The Austrian School and the Theory of Value*, p. 109) 以上を通じて遂に残されたる相違の最も大なるものは最初より一見して明なる數理的方法に求めねばならない。而も之を合理的方法の一なりとする一般の意味に於ては遂にメンガーの因果的限界利用說に對立すべきワルラスの立場を明瞭にし得ざることは上述に於て既に明である。故に吾々

は之を明にする爲にワルラスに於ける數學的方法の内容に立ち入ることを必要とされる。然りここにこそ壘太利學派とローザンヌ學派とが袂を分つて各々特殊の發達をなしたる事情を解決すべき唯一の鍵が見出され得るのである。

ワルラスは自らの數學方法に就いて種々の場合に其の必要を説いて居る。然し乍ら數學方法一般に就いて詳論せざる爲に、吾々は此等の言葉の斷片以上に出でて其の眞意を探らねばならない。先づ氏自らの言葉に於て語られる數學方法の意味を明にしやう。氏は其の純理經濟學が或は交換の理論が數學の一分科なることを明にして曰く、「交換價值は一の大きいさである。のみならず吾々は直ちに之を評量し得る大さなることを認め得る。若し一般に數學なるものが斯の種の大さを研究の對象とするならば、其處には交換價值理論なる數學の一分科が存すべきこと確實である、而もそれは今日に至る迄數學家に忘却せられて居り、従つて何等の努力も爲されて居ない。」(Elements, p. 20.) 茲に經濟學を以て science physico-mathematique なりとする理由は之れが大きいさを研究の對象とすることに在る。或は曰く、「經濟學の一切の問題は全く交換の理論に存する。而して交換の理論は市場の平衡状態に於て全然次の二つの事實に要約される。第一に各個の交換者が利用の最大を獲得すること、第二は一切の交換者に依つて爲される各商品の需給量が均等なることこれである。而して獨り數學のみが吾々をして利用最大の状態を理解せしめ得る。」と (Elements, p. XIV.) 茲に數學は利用函數の最大を證明する爲に必要とされる。或は純粹經濟學の内容を説いて曰く、「此等一切の理論は數學的理論である。換言すれば其の叙述は假令通

常の言葉を以て爲され得様とも、其の證明は數學的に爲さるべきものである。』(Elements, p. XIV.) これに依れば數學は證明の爲に用ひられるものとも解せられる。更に氏の學說の發展に就いて語る所に「利用にして一度計量し得るものとすれば、全部利用最大の状態に依つて、價格に従ふ有効需要乃至供給の函數は合理的に結果される、それは一八三八年クルノーに依つて單純に需要の函數として示されたる如く又經驗的に提供せられるものである。斯くて需要及び供給の均等状態から合理的に現在價格或は平衡價格が生ずる。従つて一切の純粹經濟學は一數學科學として構成されるのである。』と述べる。(Appliquée, p. 467.) 茲に數學は主として需要供給の函數關係を取扱ふ爲に必要とされるかに見える。此等の言葉は其の場合場合に適當なる表現なるは云ふ迄もない、然し乍ら吾々は此の言葉の中に直接今問題にする數學利用の本質を探ぐることは出來ない。それは寧ろ先きに一度引用したる次の言葉にこそ求むべきである。曰く「理論的には經濟問題の一切の未知數は經濟平衡の一切の方程式に依頼するものである。』と。(Elements, p. 289.) 云ふ所は經濟問題の一切が相關的全體としてのみ理解せらるべく従つて個々の未知數の大いさも其の相關を示す全方程式に依つて一切が同時に決定せられることを示すに外ならぬ。ワルラスの所謂平衡價格なる觀念は唯この見地に於てのみ明確に把握せらるべく、上述引用例の最後に示したる需要供給の函數關係も亦價格と需要或は供給量との關係に於て右の相關的依頼關係を云はんとするものに外ならぬ。ワルラスより生れたるローザンヌ學派は、而して一般に最近の數理學派は數學利用の最も有力なる根據を此の一般的函數關係、換言すれば一般的相互依頼關係に置かんとする。(J. Moret; P. Boyen) メン

ガの限界利用が原因として價格現象の説明に役立つに對してワルラスの稀少性が他の經濟的諸量と共に相關的全體の一地位を占めるに止まり、未知數の全體と共に決定せらるべき一つなることの意味も亦之に依つて明となるであらう。次にローザンヌ學派の代表者を借りて此點に若干の説明を加へやう。即ちパレートは曰く、「嚴格に理論的なる見地に於てさへ、數學の使用は證明の嚴密性に寸毫をも加へるものでは無い、數學と雖も前提の誤謬なる場合には通常の論理に於て然るが如く、等しく全然誤れる結論を引き出して來ることに變りはない。それ故に經濟學に數學を使用することの效用は―若し之ありとすれば―他の方面に求めねばならぬ。」(A. Osorio, "Theorie," Introduction par Pareto, p. IX) 而して氏は之を經濟現象の特性に認めて曰く、「茲に經濟的素材の一切に内在する一の甚だ重要な事實がある。現象の相互依頼關係これである。人の屢々語りたる分業も此の事實の一面に外ならぬ。各個人は他の無數の人々の中に作用する經濟的影響の中心に立つものであり、又彼の中に働く經濟的諸影響に對する應接の中心に立つものである。現代に於ては交通の便益に依つて此の相互的影響の地域が著しく擴張せられて居る。例へば米國に於て或る一年が好景氣であるとすれば米國は多額の佛國陶器を買入れるであらう、其の場合此の工業は其の勞働者の爲に多額の利益を擧げ、彼等は従前より多くの葡萄酒を買ふ、佛蘭西に於ける葡萄酒の價格は騰貴し、それは他の國例へば伊太利から輸入される、伊太利の栽培者は之により大なる利益を得、彼等は奢侈品の消費を増加し例へばより多量の商品を巴里から買ふであらう。斯くて極まる所なく、吾々は無數の結果を得る、それ等は無數の態様に於て交叉し又交錯する、即ちそれ等は相互依頼の關係に

あるのである。』(Pareto, *ibid.* p. XII.) 此等の錯綜せる現象から何等かの法則を見出すことは條件を極めて少數に限る場合と雖も甚だ困難である。所謂ロビンソンの經濟學は孤立したる人間を考へ、且つ彼が他人に及ぼす影響乃至他人が彼に及ぼす影響を無視することに依つてこれを試みたるものである。然し乍ら經濟學に於て本質的重要を持つ人對人の經濟的關係を抽象し去つて満足することは到底出來ない。』茲に一の障害が現はれる。通常の論理は吾々が原因と結果とを考へる場合の問題は適當に處理し得る、併し乍ら相互依頼の場合に於てはそれは無力となつて吾々は特殊の論理に援を求めねばならない、即ち數學的論理に之を求めねばならないのである。換言すれば、相互依頼の關係は一般に同時的方程式の一組織に依つて説明せられるものと云はれ得る、然るに通常の言語は斯かる組織を解決するには無力であり、吾々は數學に頼ることに依つてのみ之が解決を手にし得る。』(*ibid.*, p. XIII.) とは云へ吾々は元よりかゝる無數の現象を其仔細に亘つて研究し得ない、又其の必要もない、吾々の目的とする所は一の規則性或は法則の發見である。茲に於て此等の現象の中其の一定の状態が特に注意の焦點となる、平衡の状態これである。』一定の場合に吾々が平衡状態を研究すると云ふは單に吾々が或現象の最終状態を研究するものにして、繼續的狀態に止まるものに非ざることを云はんと欲するのみである。』平衡の状態とは「此の定義を幾個かの要素に擴張すれば、それは、ある瞬間に於て此等の要素の各が其働を完成したる状態を吾々に知らしめる。この状態こそ吾々の研究する状態である。』(*ibid.*, p. XVI.) 經濟學に於ける數學使用の根據に對するパレートの右の見解は氏以後現在に至るローザンヌ學派の立場に於て認められる所であり、從つ

て學派の最初の偉大なる一人としてのワルラスの見解も氏自らの言葉に於て明言せられざるにせよ、又此處に其の重點を置くものと見るを適當とせねばならぬ。茲に於てメンガーに對するワルラスの地位は明瞭となり得るであらう、即ちメンガーに於て限界利用の考へは以て價格現象を説明すべき原因の地位を有するに對し、ワルラスの稀少性は其の本來の意味に於ては價格、需要量、供給量等と共に相互に從屬關係に立つ諸量の一たるに止まり、從つて稀少性を以て平衡價格を説明する場合と雖も其意味は稀少性を原因として因果的に價格の成立を説くものと解すべからず、單に平衡價格との一定關係を表示するものと見るべきである。吾々が限界利用説に於ける二つの形態とは所謂限界利用説そのものが或は限界利用の觀念が各の學説に於て占むる地位の如上の相違を指すものに外ならぬ。次に然らば此の根本的相違は兩學説に於て、又兩學派に就いて如何なる他の相違を伴ふか。これ吾々が以下に展開せんとする問題である。

但此問題に入るに先立つて茲に二つの蛇足を加へて右の相違の意味を一層明にしたいと思ふ。其の第一はローザンヌ學派に於ても數學的方法のみを唯一の經濟學研究方法として主張するに非ざることこれである。此の點は特にパレートの諸著を見るものの容易に看取し得る所であるが茲では次の一句を引用するに止めやう、曰く「數學的方法は他の諸方法に對立するものではない、否それは單に他の手段に加へらるべき研究及び證明手段にすぎないのである。」(Pareto, *Manuale*, p. 14.)吾々は上述の説明に依つて此學派に就て數學的方法が特殊の力を發揮する部分は經濟的平衡の分析にあることを知る。而して以下の吾々の取扱はんとする問題は總て此の部分に含

まるゝ問題である従つて數學的方法を以つて之を特色づけた以上の觀點は此の限りに於て正當視され得るであらう。第二の注意すべき點はローザンヌ學派に於て所謂平衡は一般的平衡を云ふものなることこれである。即ち經濟現象の異なる要素の間に成立すべき相互依頼關係の一般的條件を云ふことこれである。此の注意の必要は特殊の場合に於ける平衡の研究が既に幾多の例證を學史の上に認め得るのみならず、茲にローザンヌ學派に對比せんとする壘太利學派に於ても亦充分に認められて居る所に存する。此の點は冒頭メンガーの學說紹介に於ても既に指摘し得る、即ち交換理論に於て互に獨立せる二交換者の交換の限界として示されるものは二個人の欲望充足の關する限りに於て又一の平衡状態と云ふべく更に獨占の例示に於て成立する價格も此の限界内に於て一の平衡價格なればである。「數理經濟學者(ローザンヌ學派)と壘太利學派が相互に共通の出立點を有するに係はらず、前者を完全に後者より分離せしむるものは一に前者が一般的經濟平衡の研究に没頭して特殊の問題の研究に自らを限定せざりし事實にこそ求めねばならぬ」(Moret, L'emploi, p.26)メンガーとワルラスに見出される以上の相違は他の如何なる相違を齎すか。進んでこれを見やう。此の異同を明にすることの目的は云ふ迄もなく限界利用説の二形態が經濟學構成の理論として發展したる經路を辿り、其の間に歸着せんとする共通の傾向を示さんとするものに外ならぬ。然し乍ら結論を先にして云へば、ワルラスに關する上述の説明に依つて既に推知せられる如く、吾々は價格の現象を一に利用價值より導かんとする試みに養成し難きものである。吾々はワルラスに就いて他の機會に其の理由を述べた、故にメンガーを主とする壘太利學派に就いて再び之を繰返へすに代へて、其の因

果的立場より生ずる若干の顯著なる學說を捕へて之を吟味し、因果關係的限界利用説は塊太利學派の内部に於ても既に完全に貫かれて居るものでないことを示すこととしたい。

價格が一に限界利用を原因として導かるべしとする塊太利學派の立場より生ずる一の結果として先づ注目すべきものは所謂限界對偶(福田博士「流通經濟講話」一三三頁參照)の觀念である。ボエーム・バヴェルクは一八八六年の論文に於て明確に此の理論を述べ(Böhm-Bawerk, "Gurndzüge," *Conrads Jahrb.* 1886)別に更に詳細に其の説明を繰返して居る。(Positive Theorie, Bd I. S. 273 f.)今氏の例解に従つて大意を見るに、それは次の如く示される。市場に數人の賣手が各々賣るべき一匹の馬を持ちつゝ多數の買手に對立する、買手は其の支拂はんとする價格の大小に従つて順次に排列せられ第一の買手は最も多くを支拂はんとするものと假定し、賣手は最も安く賣らんとするものを先頭として、其の要求する對價の順に排列せられるものとする。此の假定の下に於て今第五の買手は第五の賣手の要求する額よりも稍多くを支拂はんとし、而も第六の買手は第六の賣手の要求を支拂ふことを欲せずとすれば、此の場合賣られる馬の數は五、價格は最終の買手五と最終の賣手五との主觀的評價の間に定まるであらう。最終の一對は氏の呼んで限界對偶 Grenzpaar となすものである。エヂウオースは之が紹介に引續いて次の如き批評を加へる、曰く「其の間に賣買の可能なる最終の一對、買手第五及び賣手第五は限界對偶として偉大なる注意を拂はれて居る。けれども其の名譽は或程度に於て其の間に賣買の不可能なる第六の人々にも分たるべきものと思はれる。」と。(Edgeworth, *Papers*, Vol. II. p. 308.)此の批評はボエーム・バヴェ

ルクの更に精密なる限界對偶説に依つて其の的を失するかに見える。(Böhm-Bawerk, Positive Theorie, Bd. I, S. 279) 即ちそれに依れば價格が上限下限の二限界内に定まると云ふ意味に於ては前述に異なるなきも、其の上限下限の決定には取引の圏外に出づる賣手買手の評價が加へられる、即ち上限を決定するものは最終の買手と最初に除外せられたる賣手との主觀的評價であり、又下限を決定するものは最終の賣手と最初に除外せられたる買手との主觀的評價である。「市價の高さは此等兩限界對偶の主觀的評價の高さに依つて制限せられ又決定せられ」のである。(ibid. S. 279) 然し乍らエヂウオースの批評の要點は思ふに茲に存しない。それは價格の相關性に着目して偶々決定せられたる價格に近き一對又は二對のみを高潮することを以て非なりとするに在るであらう。(茲にエヂウオースは略ローザンヌ學派に近き立場を有する人として考へる。然し乍ら一方限界利用なる主觀的評價より一に價格を導くべしとするポエーム・バヴェルクに於て此の一對を成立せる價格との關係に顧みて特に區別することは殆んど當然の歸結と云ひ得べく、其處に何等の疑問を生じない。斯くて兩者の立場を更に深く把握するに非ざる限り、是等は遂に名稱の争ひになり終るかに見える。吾々は斯かる言葉を超へて其の底にある思想の相違に思ひ到らざるを得ない。吾々は奧太利學派とローザンヌ學派との相違をより明ならしめる問題として次の二つを撰ぶ、利用測定の問題及び價值歸屬の問題これである。前者は苟くも利用學派として主觀的利用を經濟學の基調に置くものゝ當然行き當るべき問題として、後者は奧太利學派の因果關係的立場より生じたる特殊の問題として特に問題とするに値することを信するが故である。

抑も一個人の欲望の度盛或は利用の函數から出立して因果的に價格の説明に到達せんとする學說に於て利用度の測定は避くべからざる前提問題である。完全に主觀的なる量が客觀的の價格を導き來る爲には其の量の中に既に何等かの測定の標準を含まざるを得ないからである。斯くてメンガー及びワルラスは暗黙に若しくは明に之の可能を承認する。メンガーは欲望の種類を一般的に最も急迫なるべき所謂生存欲望以下數種の階級に分ち、之を互に比較し得る數字を以て明示する。(Grundsätze, S. 123)又各々此等の欲望の度盛を有しつゝ相對立する二交換者の交換限界を論ずるに當つても同様に甲乙二人の利用が相互に比較さるべき數字を以て説明する。(S. 176f.)尤も此等の表示に於て氏は常にそれが主として説明の便宜に出づるものであり、其の數字は必ずしも欲望の絶體的大さを示すものに非ざることと斷つて居る。(S. 124, 176 Anm.)併し乍らメンガーの主觀的利用價值を價格の成立に迄貫く場合には、利用なる個人の主觀的評價が單に一の評價し得る大さたるのみならず、換言すれば其の間に大小の區別を附し得る大さたるに止まらず、進んで其の絶體的測定を豫想すること、或ひは一步を進めて所謂利用單位の觀念に迄到達せしめられることが要求せられねばならない。但メンガーに於て其の價格理論として示されるものは後に明にするが如く完全に此の立場を貫くものと云ひ得ない、寧ろ價格の或種の豫想の下に財選擇の事實そのものから出立すると考へられる、從つて吾々は此點を更にポエム・バヴェルク及びウィーザーの二氏に就いて見るであらう。メンガーの原理は既に此の一點に於ても看取せられる如く統一的組織としては尙希望の餘地を残す所多く、例へば價格に對する利用と生産費との關係、一財の全部價值と其の限界利用の關係等の

問題は、根本の原理をメンガーに受けて之を系統化したる偉大なる後繼者に求むるを至當とするが故である。斯様に利用測定の問題を後者に移すときは、それは經濟學上既に熟知せられたる全部價值對限界利用の爭論として吾々の前に展開せられる。即ち一定量の或る財の價值は其の個々の單位に就いて云へば各個の單位量に就いてのみ撰擇的に限界利用が價值を決定すると云ふ見地に立つポエム・バヴェルクは此の見地を徹底せしめる爲めに利用の測定も或る程度に於て可能なることを認め、(Böhm-Bawerk, Positive Theorie, Ed., II, Exkurs, X, Betreft die "Messbarkeit" von Geführgrößen, S. 205.) 他方財の價值を「欲望充足より説かんとする」とを主觀的に過ぎるものとするワイザーは、(Wieser, Theorie, S. 230.) 欲望價值を以て數字的には測定し得ざるものとし、財の總價值は其の限界利用から單に集積的に計算せられたるものと主張するに止めるのである。茲にワイザーが財の價值を以て單に主觀的評價より生ずる結果とのみ見ることに代へて「經濟に於て使用せられる部分財並に部分勞働と聯想せられる意義」を以て價值を定義せんとす。(Wieser Theorie, S. 230. "Wir definieren ihn (den Wert) als die Geltung, die beim wirtschaften den verwendeten Teilgütern und Theilarbeiten assoziiert wird.) に至る経路は後に示す諸點と併せて埃太利學派よりローザンヌ學派への一步の近づきを示すものであるが、吾々は此の利用測定を中心としての推移がローザンヌ學派に於ても又見られる所であり、更に後者に依つて成就せられたる改革が一部既にメンガーに見出されることを指摘して此問題の關する限りに於けるメンガーの因果的限界利用説の運命を考へんと欲する。先づワルラスの限界利用説も氏の説明に従つて因果的説明を

目的とするものと解する場合に於てはメンガーの理論と同じく利用函數を原因の地位に置くものであり、従つて利用の強度の測定は必然問題として其の前方に立つ。氏は此のことが消費量に於ける稀少性(限界利用度)函數を基礎とするゴツセン、ジェヴォンス及び自己の説の一困難を形成することを認める。然し乍ら氏は其父オウグヌスト・ワルラスに従つて此困難は不可能を意味するものに非ずと考へ、進んでアプリオリに氏の父の所謂欲望單位 (*Unité Besoigneuse*) を想像し斯くて利用の絶體的強度を可測なりとして居る。(Walras, *Appliquee*, p. 467; *Elements*, p. 76.) 之に依つて明なる如く氏は可測説をとると雖も稀少性を以て評價し得る大さをもつものと斷定するわけではない、唯理論の構成には斯く想像することを以て足れりとするのみである、併し乍ら吾々は長く斯かる想像の領域に止まることを得ない、特に此の前提の上に基かれたる全理論の美に心惹かれるものが此の想像を除いて理論を確固たる基礎に置かんと試みるに至るは誠に當然の徑路と云はねばならない。ワルラスに於て此の困難は氏が利用函數を以て價格理論を因果的に説明せんとする立場にありと見る場合特に其の重要を加へる。然し乍ら吾々が屢繰返したる如く其説の重要を寧ろ平衡理論にありと見、然も稀少性は價格と共に經濟相關の一地位を占めるに過ぎずと解する時は既に其の問題の重要は稍異なり來ることを覺えざるを得ない。その場合稀少性を始めとして價格其他の要素は悉く同時に決定せられ、其の決定に應じて一定の量がきめられるからである。經濟的諸量が一組の方程式に依て決定せられるとは之等の要素の何れもが單獨には他を決定し得ざることとを意味する。斯くて因果關係説と相關説との相違は量の決定の問題に於て特に其の重要を呈示するのである。

茲に於てワルラスの場合に於ては利用の函數に出立し、其の絶對量の測定から出づるよりは寧ろ財との關係に於ける個人的平衡狀態から出立することの利益が推測せられる。茲に所謂特殊の平衡狀態とは即ち限界利用水準の狀態を指すものであり、利用の可測性を捨てたるパレート（Theorie de choix）の選擇の理論は此れを出立點とするものに外ならぬ。否、ローザンヌ學派の立場を經濟的相關の重視にありとするならば既に其の意味に於て利用量も又斯かる相關を示す一例であり、價格を通じて無數の代用を認め得べき利用に始めより一の絶體的測定を可能とするが如きは抑もこの根本に合せざるものである。此の點に就いて可測論者は特に限界を高調し、利用の相關性を認むるも尙限界に於ては他の利用を離れたる純利用を認むべく此の點に測定の根據を求めんとする。この説は限界と利用との結合を示すものとしては大に興味ありとは云へ尙上述の相關説を覆す力なきものである。パレートに依る此の新理論が如何なる動機を有し、如何なる形に於て示されて居るかに就いては既に他の機會に於て述べた故に茲に再述することを避ける。（拙稿「三つの著述を通じて見たるオグユスタン・クールノーの經濟學說」東京商科大学創立記念論文集所載參照）其の要は其の間に選擇なき一列の商品組合せより成る所謂無關心曲線なるものが直接欲望の測定より出立して得られるのではなく、選擇と云ふ經驗上の事實を基礎として直ちに其の欲望の客觀的表現に達せんとする試みにある。ワルラスよりパレートへの此の推移は明に先に掲げたるバヴェルクとウィーザーとの相違と相對比し得られる。然し乍ら茲に注意に値する一點は、前者に於て此の出立點の變更は必ずしも學說自體の大なる變更を伴はざるに對し、一蓋しワルラスに於ける限界利用説を平衡狀態説明の一要

素と考へる場合に稀少性の函數乃至其の測度より出立することが必ずしも必要とされざる理は前段既に之を説いた。塊太利學派に於ける此の變化は其主觀的見解に若干の修正を要請されるところと見えることである。見るべし價値に對するウイーザーの見解（前段定義參照）は既に純然たる利用價値説の立場に非ざることを。ウイーザーは更にメンガーの價値に對する定義を以て稍實際上の意識を出づるものとし、經濟價値を稍客觀化したる自己の定義を之に勝れるものとする、それは「第一次的なる欲望價値を排斥するものではない、然し乍らそれを爾高く高調しないのである。吾々の云へる經濟するに當つての意義とは第一線に於て經濟の外的關係を示すものである。」¹⁾ (Wieser, Theorie, S. 231.) ハーントの撰擇の理論又主觀的なる評價の事實を直に客觀的なる財の撰擇に見るものであり、此點更に利用の大小に關する唯一のテストは價格にありとするジェヴォンスの見解に一致するものである。斯くて此の點の關する限りに於てメンガー並にバヴェルクに見られる徹底せる因果的限界利用説はウイーザーに至つて著しくローザンヌ學派に見られる相關説に近づくことを見るのである。但此の項を終るに先立て指摘すべき興味ある事實は、利用の測定なる前提がメンガー自らに於て既に客觀的撰擇の事實に其の地位を讓るを見ること即ちそれである。獨占價格の成立を説くに當つて氏が賣買兩當事者の地位を示したる表解を採つて考へる。(Menger, S. 184.) 然らば吾々はこのメンガー表が先に交換の限界を論じたる場合の表に比して既に欲望の測定そのものより出立して居ないことを認める。即ちそれは購買者の撰擇を通じて其の欲望乃至利用を見るものである。示されたる需要表は各個人の欲望が相互に一の障害として感ぜられる場合、其の間の相關の撰擇の

表現として見らるべく、價格は其の中間に立つて各個の需要者を相比較さるべき等しき平面に置くものである。従つてそれはもはや完全に價格の豫定を離れたるものとは云ひ得ない。斯くて吾々は利用測定の問題を通じて、純主觀的因果説としての限界利用説はメンガー自らに於て既に一貫されて居ないことを認める。ウイザーに至る其の發展が著しくパレートに近きことは自然の數であらう。次に塊太利學派の因果關係的立場より生ずる價值歸屬の問題を採つて茲にも同様の經過を見得ることを示さう。

第二の問題は所謂價值歸屬説であるが、これは以上の利用測定の問題とは稍趣を異にして特に塊太利學派に於てのみ殊特の發達を遂げたるのと考へられ従つて第一の問題よりは遙に明に塊太利派の因果論的立場を闡明するものである。價值歸屬の理論が最も一般的なる形に於て生産要具の價值が結局は生産物の價值から引出されると云ふ意味に於ては、共に所謂生産費學説に反對する限界利用論者ジェヴォンス、ワルラス、メンガーの三者に通ずるものと考へられる。ジェヴォンスの有名な三段の定理(Jevons, Theory, p. 165)は改めて云ふ迄もなう、ワルラスも自らメンガーとの類似に關説して曰く、「塊太利派の經濟學者も又其の生産理論に於て論理的に限界利用概念の歸結を追ひ、生産物の價值と生産手段の價值との間に、余が自ら生産物の價值と第一原料及諸生産的奉仕の價值との間に樹立したものと全く同一の關係を導き入れて居る。」(Walras, Elements, p. XVII)然し乍らワルラスに於ける其の關係は屢々述べたる如く、因果説としてよりは經濟的相關の中に一切の價值が同時的に決定せられることを意味するものであり、右の關係を示す方程式の一群を見るものは何人と雖もそれが因果關係を示す

ことを目的とするものとは考へないであらう。(註)

(註) 試みに此の關係を示す式を擧ぐれば、生産物の價格、生産的奉仕(或は生産用具)の價格、即ち地代、賃銀、利子、生産物の販賣量、生産的奉仕の量は平衡状態に於て總て次の如き一組の方程式に依つて數學的に解決せられるのである。即ち生産的奉仕の種類を T P K ……等 n 個其の價格を $p_i p_k ……$ 生産物の種類を A B C D 等 m 個 …… A を通貨として其の價格を $p_a p_b ……$ とすれば先づ此等の價格に於ける各生産的奉仕の供給合計は

$$\begin{aligned} O_i &= F_i (p_a p_b p_c \dots p_n p_m p_r \dots), \\ O_p &= F_p (p_a p_b p_c \dots p_n p_r p_s \dots), \quad [1] \\ O_k &= F_k (p_i p_j p_k \dots p_n p_o p_u \dots), \\ &\dots\dots\dots \end{aligned}$$

の n 個の方程式として示され、各生産物の總需要は

$$\begin{aligned} D_b &= F_b (p_a p_b p_c \dots p_n p_o p_r \dots), \\ D_i &= F_i (p_a p_b p_c \dots p_n p_o p_r p_s \dots), \quad [2] \\ D_a &= F_a (p_a p_b p_c \dots p_n p_o p_r p_s \dots), \\ &\dots\dots\dots \end{aligned}$$

$$D_a = O_i p_i + O_p p_p + O_k p_k + \dots (D_b p_b + D_c p_c + D_d p_d + \dots)$$

の m 個の方程式として示される(合計 $n+m$)

更に各生産物に入る生産的奉仕の割合が夫れ夫れ $a_i c_m a_k \dots b_n b_m b_k \dots c_a c_b c_k \dots d_a d_p d_k \dots$ とすれば(氏は之を生産係數 Les coefficients de fabrication と呼ぶ)各種生産に用ひられる或る生産奉仕の量の合計は其の奉仕の供給に等

しかるべき理に依つて

$$\begin{aligned}
 a_e D_e + b_e D_b + c_e D_c + d_e D_d + \dots &= O_e \\
 a_b D_e + b_b D_b + c_b D_c + d_b D_d + \dots &= O_b \\
 a_c D_e + a_c D_b + c_c D_c + d_c D_d + \dots &= O_c \\
 \dots &\dots
 \end{aligned}
 \quad [3]$$

のn個の方程式を得べく更に生産物の賣價は生産的奉仕に依る其の再生産價格に等しかるべき理に依つて

$$\begin{aligned}
 a_e p_e + a_q p_b + a_e p_c + \dots &= 1 \\
 b_e p_e + b_q p_b + b_c p_c + \dots &= p_b \\
 c_e p_e + c_q p_b + c_e p_c + \dots &= p_c \\
 d_e p_e + d_q p_b + d_e p_c + \dots &= p_d \\
 \dots &\dots
 \end{aligned}
 \quad [4]$$

のm個の方程式を得べく方程式の数は合計 $2(n+m)$ となる。然し其の中には全く同様なる一個が含まれる爲に實數は $2m+2n-1$ となり、而してこれは、(一)奉仕の供給總量n、(二)奉仕の價格n、(三)生産物の需要總量m、四及び此等の生産物の一を通貨として其の相互に成立すべき價格 p_1, \dots, p_n 、合計 $2m+2n-1$ の未知數を決定するに必要且充分である。
 (Walras, Elements, p. 211—214.)

斯くして經濟現象の相關性を高調し、一を原因とし他を結果とすることを以て非なりとするローザンヌ學派に在つて價值歸屬の問題が特に著しき發展を見ざる理由は既にワルラスに於て充分に豫測し得る所である。然し乍

ら他方限界利用説の因果的立場よりこれに特殊の重要を置きたる奧太利學派に於てもメンガーの説く所は必ずしも氏以後の説く所と同様でない、此の變化を一見することは此問題に於けるローザンヌ學派の主張を明ならしめる所以と信ずる故に以下メンガー、ボエーム・バウエルク、ウイーザーの三氏に於ける發展を辿つて見やう。

メンガーに於て價值歸屬學説の依つて生ずる所以が一方に於て欲望充足を中心とする財順位の理論 (S. 101-103) 他方に於て補完財の理論 (S. 23-26) に由來するものなることは敢て特説を必要としない。氏は之を説く場合に於ても一應は生産的補完財が全體として其の生産物の利用を反映することを述べて右の第一の點を明示するが同時に其の生産財が相補完して生産に當ること、及び其の相互の關係は必ずしも嚴密に規定せられるものでない所から各生産財の生産寄與を語ることが實際上必要でもあり又事實でもあると述べて居る。吾々が今問題とする所はこの生産寄與の量の問題であり従つて茲にはそれが如何にして決定せられるかに就いての氏の結論を掲げれば充分であると思ふ。氏は次の如き三個の場合を分つて (一) 高級財の一定分量の價值は其の参加せる全生産物の價值ではなく、此の一定分量が生産から缺けることに依つて減少すべき部分生産物の利用に等し (二) 此財が生産から缺けることに依つて生ずる結果が生産物の質の低下なる場合には此補完財の價值は此の質の低下に依る利用の減少に等し (三) 此の財が生産から缺ける場合他の補完財も又他の用途に向けられる場合には此財の價值はそれが生産に参加して生ずる價值と他の補完財が他の用途に於て齎すべき價值との相違に等しい。と論じ之を要するに「或る具體的高級財の價值は吾々が此の財を支配する場合と然らざる場合とに於て、かち得らるべき欲

望充足の意味の相違に等しい（何れの場合にも吾々の支配にある高級財の全體を經濟的に使用するものとして）」と云ふ一般的原则が樹立せられる。（Grundsätze, S. 155—7.）ボーム・バウエルは「價值歸屬理論は即ち補完財の價值理論である。」（Gesammelte Schriften, S. 218）と述べて明にメンガーと同様の立場を採る。今氏の要約する所に従つて之を見るに、かかる補完財の價值測定は主要なる場合(A)と重要之に次ぐ(B)とに分れる。(A)は補完財の總價值が其の生産物の限界利用に依つて決する場合であり、それは次の三項に分れる、(a)各補完財が他の用途を有せず又他の代用物を有せざる場合には、各財の價值は相互に代替的に此の總價值に等しい。(b)各補完財が他の用途を有する場合には各生産財は其の補完に依りて生産する財の總價值と他の財の他の用途よりきめられる單獨價值の合計との差に等しい、此の計算も亦代替的である。(c)右の場合一財が代用物を有し、其の欠缺が直に此の代用物に依つて補はれる場合には其の財の價值は此の代用價值に等しい。(B)は生産物の價值が其の限界利用に依つて決せられざる特殊の場合でありそれは各生産財が各代用物を有する場合であつて、此際生産物の價值は各財の代用價值或は其の費用價值の合計に依つて示される。(Böhm-Bawerk, Positive Theorie, I. d. I S. 220 f.)氏が(B)に於て費用價值の法則を認むる點はメンガーに比して稍異なるものであるがそれは生産物の價值が既に限界利用に依つて決定せられざる場合であり、一般的なる場合に於てはメンガーと同じく欠缺算法をとるものである。共に或具體的の生産財の價值を見出す方法は此の財が生産に参加せざることに依つて全體の収益が如何程減少するかに依るものである。之に對して著しき對照に立つものはウィーザーであり、氏は斯かる

計算法は實際に於て他の財の協働に俟つ所をも加算するが故に其の財の價値を過大に見積るものと難じ自ら別に各財の積極的生產貢獻説を提唱する。次に氏の「自然的價値」に従つて其の要點を摘記して見やう。(Wiener Naturliche Wert, S. 80f.)氏が此種の欠缺計算法に反對する所以は、一生産財が生産から外れる場合には同時に他の生産財の生産的貢獻をも一部分持ち去るものであり、此の同時に持ち去られる他の生産補完財の生産的貢獻は問題とする生産財の價値に計上すべからずと云ふにある。斯くて、氏に依れば(一)いま茲に數個の生産要素互に協力して他の一財を生産する場合、此事實のみを以てしては各生産財の生産的貢獻を知る材料として不足である。(二)此の生産財が又他の用途を有する場合には此の他の用途に於ける各の價値に依つて此の生産に於ける其の財の價値を推定することが出来る。併し乍ら實際補完價値を精密に計算し得る場合は(三)實際に行はれる生産の種々の組合せに於て生産物の量その價値及び生産手段の量が知られて居る場合であり、此の場合には例へば X, Y, Z 三財の種々の組合せと其の產出する價値とは次の如き三方程式として現はされ各生産財の價値は其の未知數の大小として計算することが出来る。

$$X + Y = 100, 2X + 3Z = 290, 4Y + 5Z = 59$$

$$\therefore X = 40, Y = 90, Z = 70$$

ウィーザーは後に其著「社會經濟の理論」に於て此の説明を改め特殊財(即ち自然的獨占財)の價値歸屬に就いては此の生産に於ける他の費用財の價値を全收益から控除して得られるとの計算法、即ち前述の欠缺算法をと

つて居るが、尙一般の場合に於ては右の積極的生産貢獻説をとつて居る。(Wieser, Theorie, S. 212 f.) ウィーザーは之に基いてメンガーの歸屬理論は實際に合せざるものとし、メンガーの根本思想は實際的經濟計算が偶然なる欠缺の前提より出立するものとするに在る。然し乍ら吾々の知る如く經濟的利用歸屬は決して斯かる假定に礎かれて居るものではない、否斯かる假定に礎かれ得ないものである。…經濟的利用歸屬は常に期待せられたる最高の利用結果が又實際上實現せらるべしとの假定に礎かれてゐるのである。」と (Wieser, Theorie, S. 211.) 故に主としてメンガー、バヴェルクに對する意味のウィーザーを見んとする今の場合に就ては以上の説明を以て差支へないものと考へる。扱メンガーよりウィーザーに至る此の推移は何を意味するか、吾々を以て之を見れば、これは少くとも數量問題の決定に於て因果論的限界利用説の徹底し得ざることを示すものに外ならぬ。即ちメンガー及びバヴェルクに於て一生産財の價值が主として欠除算法に依つて考へられることは欲望充足を中心とする其の學説の因果論的構成の當然の結果であると云へる。之に對するウィーザーの生産貢獻説の意味は、故に一に欲望充足を中心とする説明に依つて此等の量の決定を導くことが不適當なることを示すものと云はねばならない。誠にウィーザーの右の關係方程式を見るものはそれが甚だ簡單なる形に於てではあるが前述ワルラスの生産方程式に類似することを看取せざるを得ない。それがワルラス其の他一般に數理學説の示す所に比して如何なる程度に不完全なるやの説明は今之を主題とするに有ざる本論の盡し得ざる所である、此點は特に Edeworth. Review of Wiesers Natural Value. Papers. Vol. III, p. 25 f. 參照) 茲には其の立場が著しくローザンヌ

學派のそれに近づくことを指摘するに止めねばならぬ。殆ど同一の立場から出立する塊太利學派とローザンヌ學派が此等の問題に於て結局其の歸趨を一にすることは一面より見て寧ろ當然と云ふべく其の方法の故に相交渉すること少なかりし從來こそ反つて吾々に疑問と思はれる。

吾々以上主として利用測定の問題及び價值歸屬理論を塊太利學派の純主觀的經濟學說より生ずる特殊の態様を明にするものとして選り、且つ此等の特殊の理論に於て既に因果的限界利用說が貫徹し難きものなることを看取した。此等の問題の關する限りに於て塊太利學派それ自らの中に見える發展の傾向はローザンヌ學派の相對的價格理論と其の傾向を等しくするものなることを認めたのである。限界利用なる純主觀的立場より因果的に價格を解かんとする試みは上の二個の例に就いて云へば第一利用度に測定單位を見出し難きこと、第二、經濟量相關の事實に依つて極めて困難となるべく此の困難を中心とする兩學派の發展傾向は著しき相似を吾々に示すのである。然し乍ら云ふ迄もなく兩學派の比較研究はこの一二の問題を以て終るものではない。以上は兩學派が共にゴッセンの法則を近代經濟學の基礎と見る點に顧みじ(Walras, *Etudes d'économie sociale*, p. 351—, Böhm-Bawerk *Positive Theorie*, Bd. II, S. 164—5, Wieser, *Theorie*, S. 133, 143.) 先づゴッセンの法則に直接の關係ある二問題を選擇したのみである。吾々は之に續いて更にゴッセンの法則を超へたる兩學派の發展を見なければならぬ。蓋し兩者共に經濟學に於ける動態の研究に於て、或は經濟的契機と外經濟的なる契機との認識に於てゴッセン法則の適用なき新分野を開拓しつつあるからである。ジュンペーター、バレットに於ける經濟動學、ウイ

一サーに見出される單純經濟と國民經濟との對立等は之を語るものに外ならぬ。之等の一切に亘つて兩學派を比較研究し其の間に理論經濟學の行くべき路を見出すことは之に續く問題であるが、本稿としては其の基礎を取扱ひ其の出立點を示す一篇として筆を擱かねばならない。

大正一五・二・一六

中山伊知郎